

「地域を巻き込んだアウトリーチ」

～ 課題集中高校の学校図書館における若者の貧困化に対する予防的支援～

NPO法人パノラマ
代表理事 石井正宏
理事 松田ユリ子(学校司書)



平成27年度 ぴっかりカフェ事業報告

延べ開催数	39回
延べ来所者数	5,220名
平均来所者数	134名 (Max 263名 / Low 40名)
飲食費	計141,068円 (1回 / 3,617円)
ボランティア参加	131名



石井正宏 自己紹介

- 69年生まれ 東京出身 3人の子どもの父
- 2000年 東京福生市にあるNPO法人青少年自立援助センター入職
- ひきこもりの若者への家庭訪問支援、居場所事業、生活寮運営、様々な就労支援プログラムの実施責任者を経験
- 若者自立塾（福生）、地域若者サポートステーション（足立）の責任者を経験。たちかわ、かわぐちサポステ特別相談員
- 2009年 株式会社シェアするココロ設立代表取締役社長就任
- 横浜市Eサポートステーション事業「ハマトリウム・カフェ」受託
- 2011年 一般社団法人インキュベーションネットよこはま理事就任
- 横浜PS「生活・しごと・わかもの相談室」相談員
- 2012年 政府主催「雇用戦略対話ワーキンググループ」第2回会合出席
- 神奈川県立田奈高等学校評議委員及び、有給職業体験バイターンの企画運営
- 2013年 内閣府「困難を有する子ども・若者及びその家族に対する支援の在り方に関する調査研究」企画分析委員
- 2014年 かながわ生徒・若者支援センター「Sketsかながわ」運営委員就任
- 2014年12月 学校図書館居場所カフェ「ぴっかりカフェ」をオープン
- 2015年3月17日 NPO法人パノラマ設立



「雨漏りのする家」

困ってからの支援は、雨漏りのする家の床にバケツを置き、溜まった水を処理する支援である。

家(国)がビショビショにならないためには絶対に必要な支援です。しかし、このやり方ではすぐに限界が来るのではないのでしょうか？(すでの限界なのではないのでしょうか？)

「雨漏りの穴を塞げばいい」

まだ困っていない、これから困りそうな人たちへの
「予防支援をすればいい」



毎年約 **15万人** 近い高校生が、
なんの職業経験も持たず、不安定
な状態で社会に....。

これらの若者たちは、
これから困るリスクの高い人でしょうか？

Yes or No



進路未決定になりやすい生徒の特徴

女子生徒

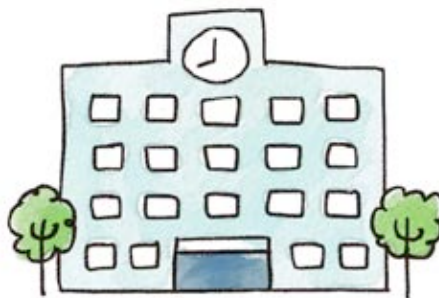
片親世帯

生活保護
世帯

このような特徴の生徒が集中的に入学してくる高校が
課題集中校と呼ばれている。

普通科学力下位校や定時制高校に多い。

経済格差の象徴



福祉以上就労未満の若者たち

～ この図の中に隠されたいろいろな“移行”や“連携”を考えてみる～

正規労働

非正規労働

この人たちの
移動可能性を高める
支援と政策

この人たちの
数を減らす
予防支援と政策

どちらの岸にも
辿り着けない若者たち
(支援機関)

多くの若者は中州にたどり着かない...

教育と雇用の接続を失敗した者が上流から流れて来る。

教育機関

生活保護

知的・精神障害者手帳の取得

福祉的就労

・・・
高齢ひきこもり
自殺や一家心中
反社会的行動

平成24年度横浜市こども青少年局（市内15歳～39歳の男女）

横浜市のひきこもり調査結果

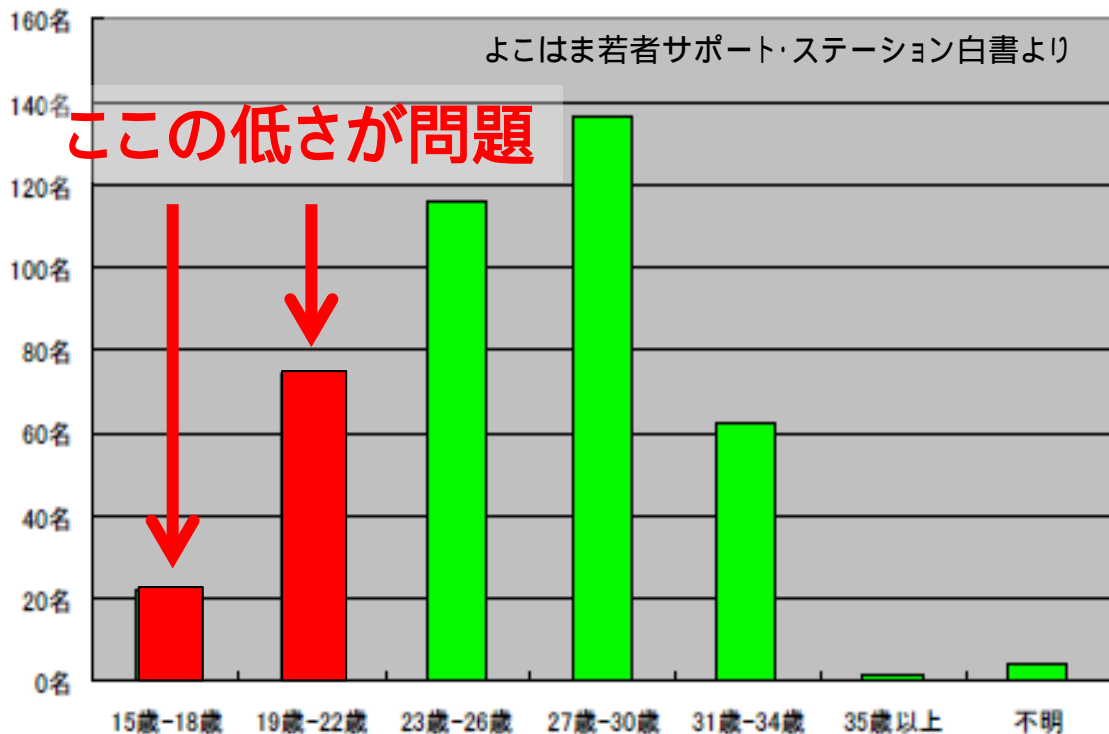
- 横浜市には8千人のひきこもりがいる。
- 予備軍は5万2千人いる。

300人

よこはま若者サポート・ステーションの年間新規利用者数

高校等の所属を失うと、支援の手が届かなくなる。

サポステ利用者の年齢別来所者数



高齢化によるリスクの増大

- ｜ 親子関係の不和
- ｜ 対人スキルの低下
- ｜ 対人恐怖
- ｜ 精神疾患の発症
- ｜ 社会性の喪失
- ｜ 履歴書の空白
- ｜ 自尊感情の低下
- ｜ 支援機関との年齢的ミスマッチ
- ｜ 年相応ができない

↓
就労困難

限られた予算の中での、支援の選択と集中をするなら、ハーティーンの教育と雇用の接続支援

子どもの貧困や貧困の連鎖が大きな社会問題

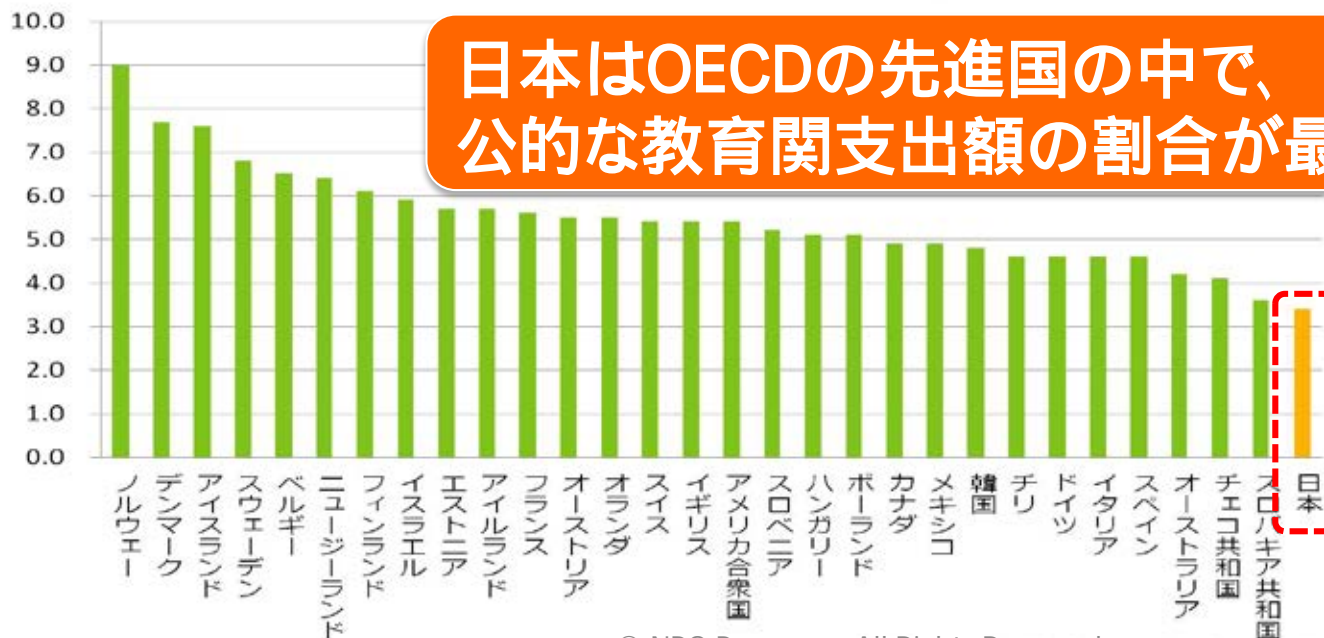
日本の子どもの相対的貧困率は15.7%。
約6人に1人の子どもが貧困状態

平成22年国民生活基礎調査

片親世帯の相対的貧困率は50.8%。
OECD主要11カ国中世界第2位。

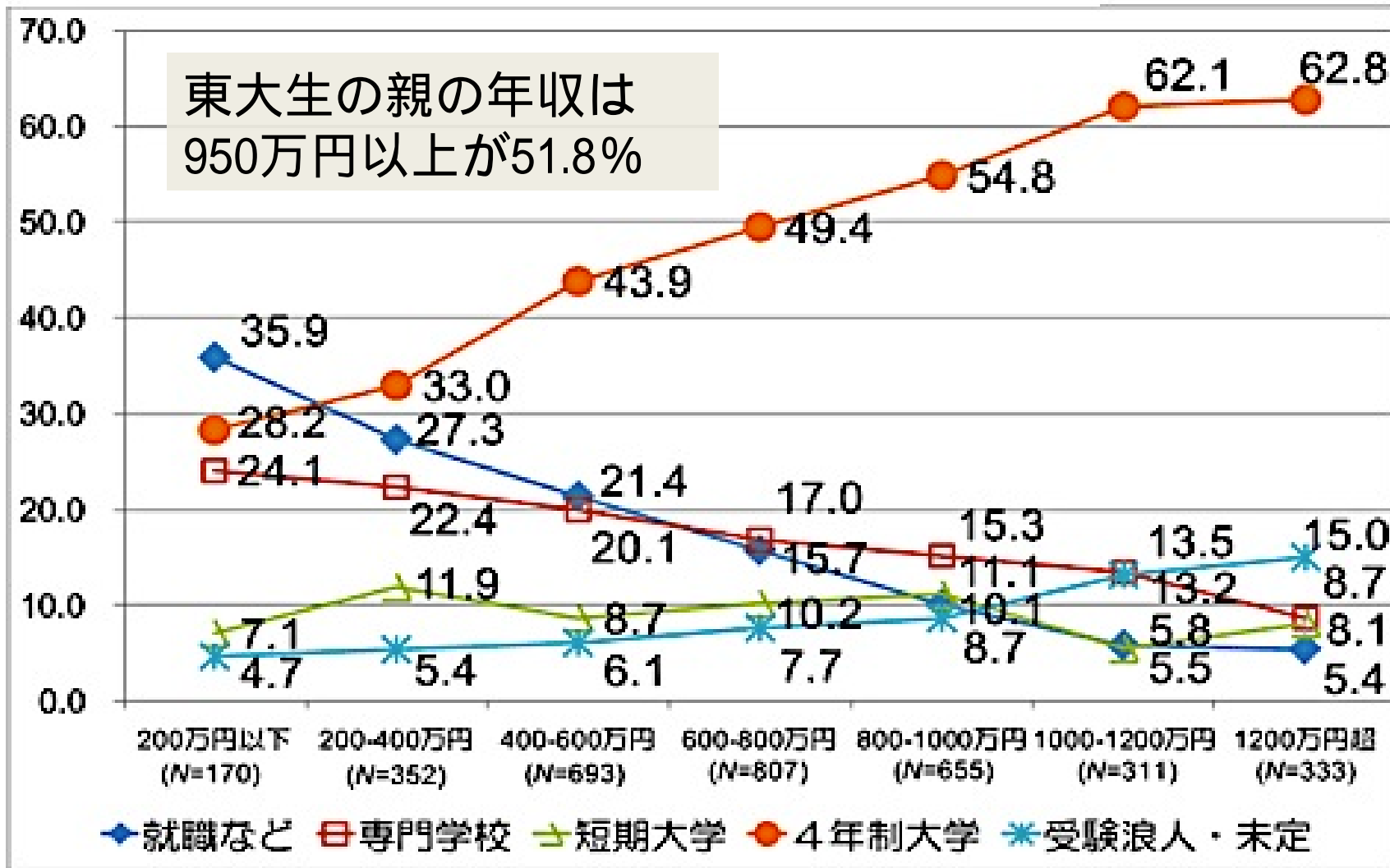
平成22年国民生活基礎調査

国内総生産（GDP）に占める公財政教育支出



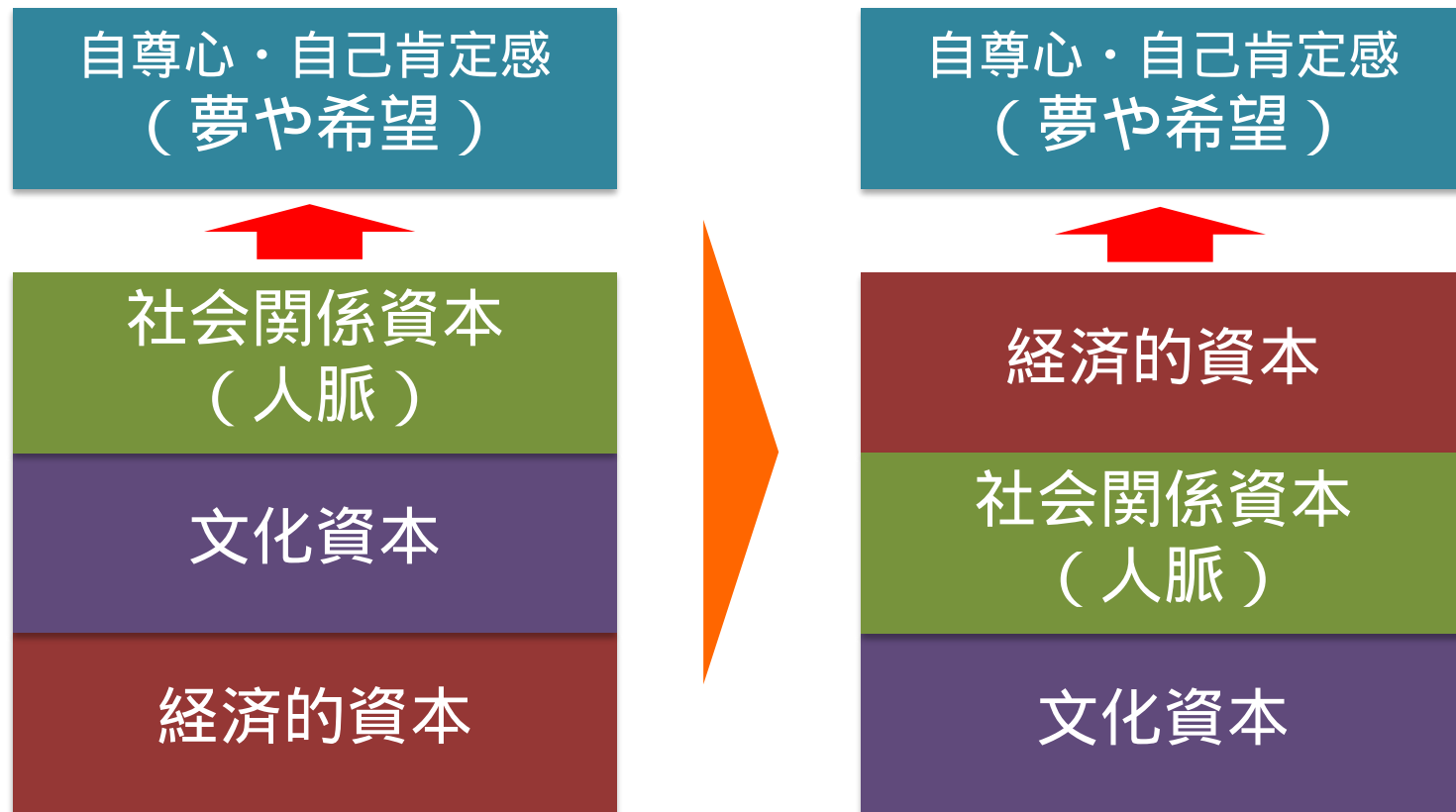
経済格差が教育格差となっている

平成21年東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センター



積み上げのベースを文化資本で再構築する

ブルデューは、人間の持つ資本を、**文化資本**、**経済資本**、**社会関係資本**の3つに分類した。彼は社会的地位の再生産の議論において、これらの**資本を多く持つ人ほど、進学や就職において有利であり高い社会的地位につくことができる**とした。Wikipediaより



困難な状況に陥るリスクの高い若者の傾向

若者支援機関に現れる若者の特徴

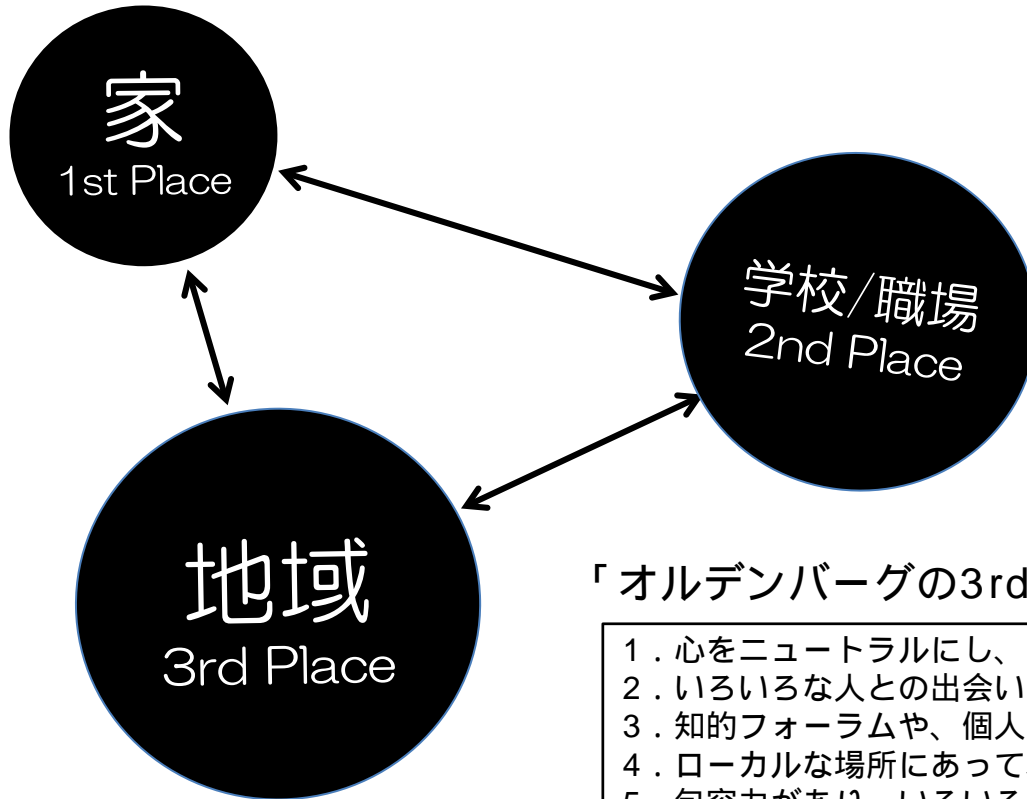
「親と先生以外の大人を知らない」



大人の経験値や視野の広い情報を得ることがなく、
職業観、価値観が狭くなり行き詰まり易い。

多様な価値観やロールモデルに出会える、知識や
経験の再分配プラットフォームが有効である。

学校に中の“溜め” 2.5プレイスモデルについて オルデンバーグの3rdプレイスモデル



スタバは、家庭と職場や学校の間にある、日常を忘れてくつろげる「サードプレイス」

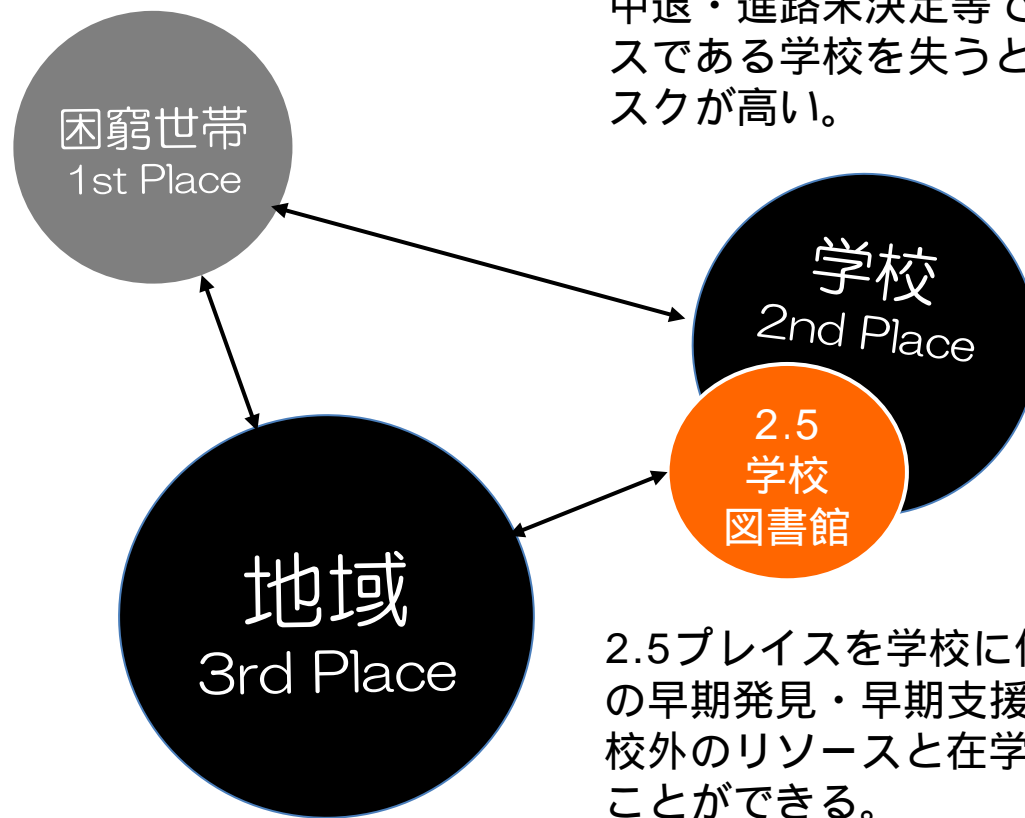
「オルデンバーグの3rd Place モデル」

1. 心をニュートラルにし、ありのままの自分に戻れる。
2. いろいろな人との出会いの場を提供してくれる。
3. 知的フォーラムや、個人のオフィスとしても機能することがある。
4. ローカルな場所にあって、いつでもアクセスできる。
5. 包容力があり、いろいろな人を受け入れる。

3rdプレイスを持たないサラリーマンが定年退職すると、
行き場を失い、普通の大人でも「ひきこもり」になり孤立する。

学校と地域をつなぐ2.5プレイスモデル

困窮世帯は社会的孤立しているケースが多い。



中退・進路未決定等で2ndプレイスである学校を失うと孤立するリスクが高い。

2.5プレイスを学校に作ることで課題の早期発見・早期支援を可能にし、校外のリソースと在学中につながるができる。

2.5プレイスがあることで、卒業生や地域住人が学校に入りやすくなり、生徒の社会関係資本が広がる。

貧困支援のポイントは スティグマ（恥辱）を生まない支援

スティグマが生まれる状況

- 自分だけが支援を受ける
 - 特定のグループだけが支援を受ける
 - それがバレる（秘密を持つ）
- } 受けたくない支援

スティグマが生まれない状況

- 誰もが利用でき、バレるという感覚を持たない

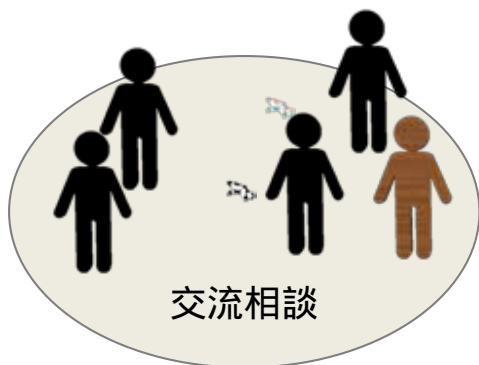
支援者 / 被支援者の時点でスティグマが発生している

一般的な個別相談と交流相談の違い



- ・自分の相談ニーズに気付いた生徒、または、教師により気づかされた生徒が対象。

顕在化した課題に対応



- ・相談をする意識がないまま、相談員と出会い、雑談をしているうちに課題を語り出している。

潜在的な課題にも対応

テストの点は普通で、学校にはちゃんと来ていると、
重大な課題に教師は気づけず、生徒は言い出せない。

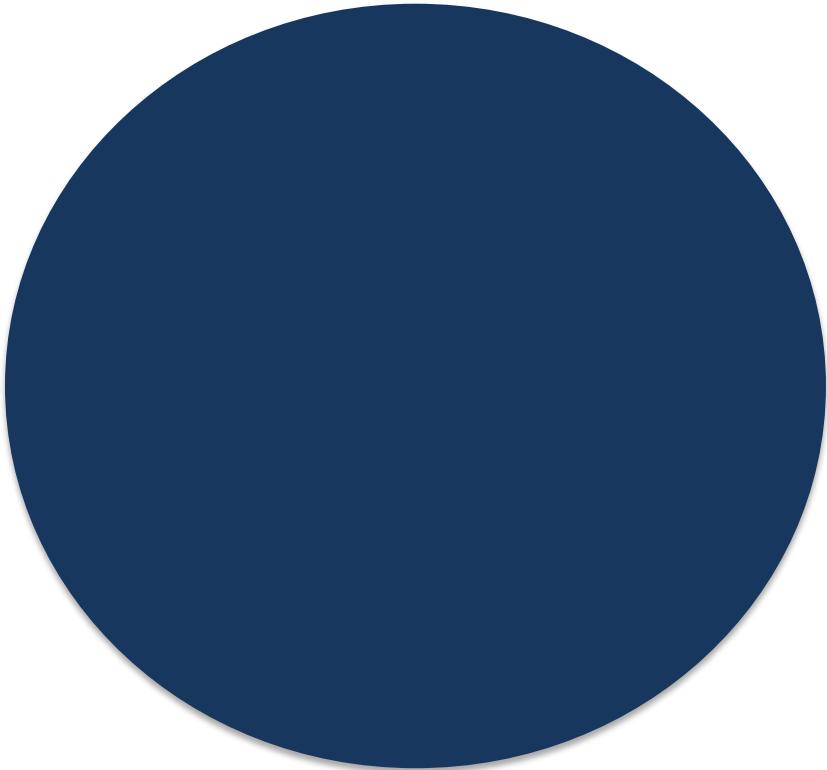
若者との信託貯金を貯める



一定程度の残高が貯まると、
子ども・若者は自分のことを語り出す

交流相談の場で起きてるチャンクダウン

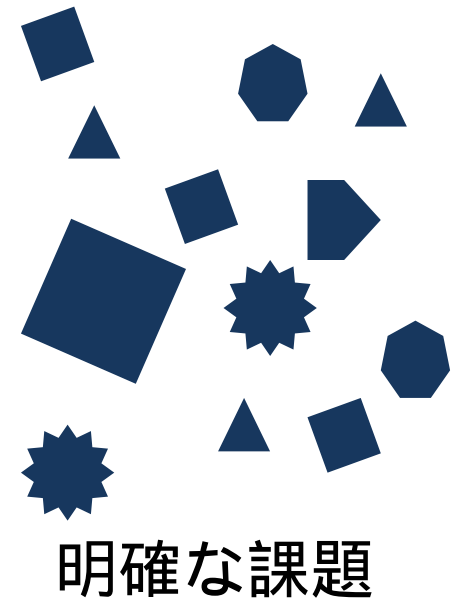
若者がよく言う「漠然と不安」て何だろう？



不安の
大きな固まり
(チャンク)

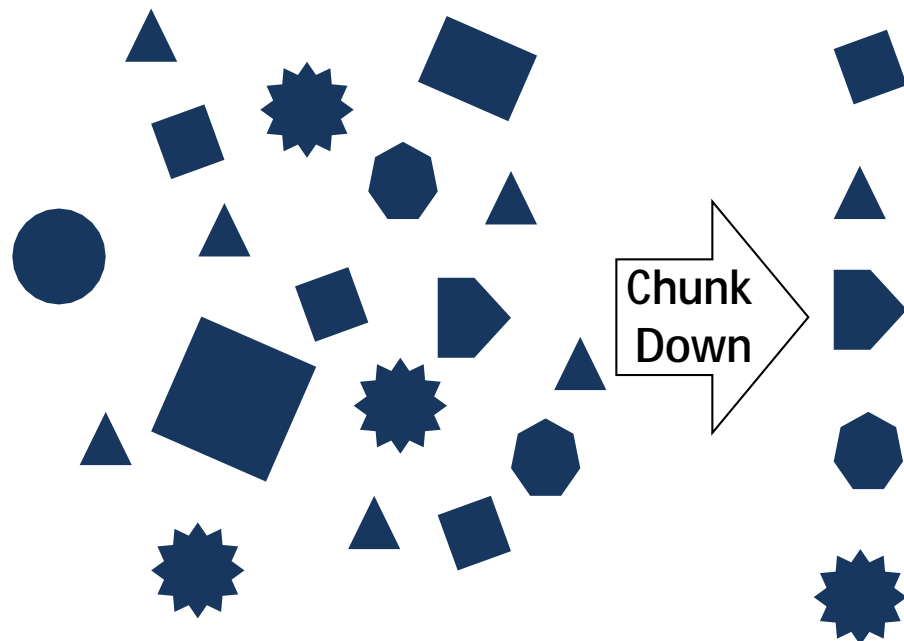


Chunk
Down



人は漠然とした不安の状態では課題解決行動を起こせない。

教師の専門性では解決できない課題の発見



進路の問題 = 進路指導室

心の問題 = SC (スクールカウンセラー)

身体の問題 = 保健室

家庭の問題 = ???

バイトの問題 = ???

司書の専門性では解決できない課題を司書は発見している

若者支援の流れから考える 司書と支援者の連携とは

発見

誘導

参加

出口

- 図書館には困難を抱えた生徒が来館しがち
- 司書はその違和感を発見しがち
- 生徒の困難は複合的で漠然としがち
- 学校には漠然とした不安の窓口がない感じ



そうこうしているうちに学校に来なくなり、気づくと中退している...



もっと自分にできたことはなかったのだろうか？

若者支援の流れから考える司書と支援者の連携

発見

誘導

参加

出口

- 図書館には困難を抱えた生徒が来館しがち
- 司書はその違和感を発見しがち
- 来週のカフェで支援者につないでみよう
- **フラットな空間で信頼関係を構築する**
- 個別の相談に誘導し、詳細な状況把握と、アセスメントを行う
- 校内で解決が難しい場合や中退の意思が強い場合は、外部機関との連携を図る



よっしゃ！